漢文訓読体日本語における「以て」の文法的記述

浅山　佳郎

Grammatical Description of “motte” in the Kanbun-Kundoku Style of Japanese

ASAYAMA Yoshiro

This paper describes the analysis of the morphemes of “motte” in the Kanbun-Kundoku style of Japanese on the Kundoku of “Rongo”, “Moushi”, and the “Kokugo” as sources. The analysis will focus mainly on the three morphemes, “wo motte” used as an adjunct, “～ wo motte-su” used as a verb, and “motte” used alone. In the first section, I will focus on “wo motte” as an adposition and analyze the fact that it is only an adjunct. At the same time, it will be shown that “wo motte” is more frequently used than other morphemes and is important as an element outside the essential case in Kundoku Japanese. In the next section, I will discuss “wo motte-su” as a compound verb and show that it is not an inversion of an adpositional construction but a compound sentence, “VP + ni + N wo motte-su”. This analysis solves the problem of the grammatical difference between the case of an adposition and the case of a verb, which has been a problem for some time. I also point out that the motive for making compound sentences is to indicate a situation as a prospect for the future. In the last section, I take the single use of “motte” and show that it is both an element inside of VP and a complement marker.

１　研究の対象

本稿は，漢文を訓読した日本語文の文法をあつかうもので，特に「以」の訓読である「もって」（以下「以て」と表記する）について記述的な分析を行うことを目的とする。いわゆる漢文訓読体という「文体」については，その文法研究は体系的な形ではなされていない[1]。本稿は「以て」というひとつの形態素を取り上げるものではあるが，いわゆる用法という意味論的な分割記述を企図するものではなく，言語体系としての訓読体日本語の文法記述を企図するものである。

本稿が資料とするのは『国訳漢文大成』本の『論語』と『孟子』と『国語』である。漢文訓読は長い歴史を持ち，様々な「文体」を持つ[2]。その中で本稿は，一定の体系化が図られたと思われる近代の訓読から『国訳漢文大成』を取り上げた。『大成』は，1920年から1924年にかけて国民文庫刊行会によって刊行された叢書で，その訓読および訳注者には，近代における中心的漢学者であり，かつ近代における漢文訓読の基準となった1912年の「漢文教授ニ関スル調査報告」（『官報』第8630号）の中心的な責任者である服部宇之吉が加わっている。本稿で取り上げた資料における訓読者は以下のとおりである。

（１）　a　論語　服部宇之吉
　　b　孟子　服部宇之吉
　　c　国語　林泰輔

この訓読文から「以て」の用例を抜き出して分析対象データとした。なお，「もって」には，８例の「用って」があり，日本語としては「以て」と同じ語であるとみなすべきであるが，用例が少ないのと，古漢語との比較検討が複雑になるので，本論の分析対象からは外した。

今回の調査対象となった「以て」は全部で1299例があったが，その中心となるのは以下の３種である。

（２）　a　杖を以て蓧を荷ふ。（『論語』微子）
　　b　これを約するに礼を以てす。（『論語』顔淵）
　　c　一言，以て不知と為す。（『論語』子張）

このうち（２ａ）が以下のセクション２で見る後置詞的に使用される「～を以て」であり，（２ｂ）がセクション３で見る動詞的に使用される「～を以てす」であり，（２ｃ）がセクション４で見る単独で使用される「以て」である。

このうちの後置詞的な「～を以て」には，以下のような「何を以て」と「ここを以て」の用例がある。

（３）　ａ　何を以て徳に報いむ。（『論語』憲問）
　　ｂ　ここを以て君子は為さざるなり。（『論語』子張）

これは「何以」と「是以」に対する慣用的に固定化された表現とみなして，分析対象から外した。ただしその文法的な性格としては，基本的に後置詞的な「を以て」の他の用例と変わらないと思われる。

また後置詞的「を以て」および単独で使用される「以て」には，以下の

（４）　ａ　これを以て孝と為すか。（『論語』為政）
　　ｂ　民猶ほ以て小と為せり。（『孟子』梁恵王下）

のような「以為」（または「以～為」）に対応する固定的な表現があり，またセクション４で再度触れることになるが「可以」に対するやはり固定的な以下のような表現もあるが，これらもすべて慣用的固定とみなして記述対象から外した。

（５）　　詩は，以て興す可く，（『論語』陽貨）

こうした固定的な表現を除外した残余は996例で，それを先の（２）例に掲示した３種類に分けると以下のような分布になる。

（６）「以て」用例の分布

「以て」の種類	用例数
を以て（後置詞的用法）	258
を以てす（動詞的用法）	217
以て（単独の用法）	510
その他（以てなり／以てする所等）	11
合計	996

以下，順を追ってこの３種類の「以て」について，その文法を記述する。

２ 「を以て」の分析

「以て」が対応する古漢語の「以」の用法のうち，いわゆる介詞と呼ばれる接置詞（漢語文法の用語としては「介詞」であるが，訓読文という日本語をあつかうことを考え，以下本稿では「接置詞（adposition）」という用語を使用する[3]）として使用されたものは，「を以て」の形式で訓読される。以下の例である。

（７）　a　陳子以時子之言告孟子。（『孟子』公孫丑下）
　　b　陳子 時子の言を以て孟子に告ぐ。

訓読日本語では格助詞「を」が名詞句「時子の言」に後接する。ただしこの「を」は述語動詞の「告ぐ」によって付与されているのではなく，「以て」によって付与されている。そのことは以下のような別の動詞が存在せず，述語要素として対格付与能力が無いと想定される「なり」によっている節でも対格が出現していることで確認される。

（８）　　三襲を以てなり。（『国語』周語下）

また以下の例文のように，主動詞である「伐つ」が他の対格をすでに付与しているような例も多数見られる。

（9）　今 燕を以て燕を伐つ。（『孟子』公孫丑下）

こうした例は，日本語に二重対格付与制約があることを考えれば[4]，やはり「以て」によって対格が与えられている例証となる。

しかしながら，形式的には対格付与能力を持つこの「以て」は，本来の動詞としての機能を喪失しているため，いわゆる活用することができず，また「を」と「以て」の間に別要素を挿入することができない。以下はその例であるが，訓読日本語としては非文となる。

(10)　a ＊陳子 時子の言を以ち孟子に告ぐ。
　　b ＊陳子 時子の言をも以て孟子に告ぐ。

よって「を以て」は，複数の形態素の複合による形式ではあるが，中間挿入を許容しないという点で１単語のようにふるまうものであり，現代日本語学で複合格助詞というカテゴリーとしてあつかわれるものである[5]。

いわゆる介詞であれまた複合格助詞であれ，その機能は，節内の名詞と述語とを文法的に結合させることにある。よって「を以て」も，名詞句が節中で述語動詞と結合する際の文法的または意味的関係としての「格」を付与する機能をもつとみなしうる。ただし日本語で格を標示する格助詞と比較すると，「を以て」は明確により長い形態であって，余剰的である。これは古漢語における以下の例のような接置詞のいくつかに対して，訓読日本語がそれらをいわゆる置き字として取り扱うのと異なる。

(11)　a　河内凶，則移其民於河東，移其粟於河内。（『孟子』梁恵王上）
　　b　河内 凶なれば，則ち其の民を河東に移し，其の粟を河内に移す。

この例の「於」は，置き字として不読の処理がされているが，訓読文としては，もとの接置詞が接続している名詞を訓読する位置で格助詞を添加することによって格が付与されている。格助詞という短い形態による処理であるという点で「を以て」とは異なっている。

述語動詞に対する必須情報をになう項名詞は，古漢語では動詞の前後に直接置かれる。動作主主語を代表とする名詞に付与される主格は訓読日本語では格助詞のないゼロ格で標示され[6]，目的語名詞句に付与される対格は「を」によ

って標示される。

(12)　a　穆王 将征犬戎。
　　b　穆王 将に犬戎を征せんとす。(『国語』周語上)

この例文中の述語動詞は「征す」であるが，それに対して「穆王」がゼロ標示による主格名詞句であり，「犬戎を」がヲ格による対格標示である。

こうした項名詞句に付与される格助詞による格と比較して，「を以て」が名詞を標示する要素としては余剰と見える形態をとっているのは，それが必須の項を示すのではないからであると考えられる。そしてもしそうであるとすれば，「を以て」を含むVPまたはTP内部には，他に必須の項が既出であることが予想される。

これを確認するため「を以て」句を含む用例258例について，目的語など他の名詞句が出現しているか否かを調査した数値が以下の表である。

(13)「を以て」を含む節における他の出現名詞句

他の名詞句	出現数	比率
他の名詞句が無い節	42	16%
対格目的語が出現している節	114	44%
与格目的語および与格補語が出現している節	75	29%
目的語と補語など２項が出現している節	7	3%
目的語などが主題化して文頭に移動している節	2	1%
その他の格の補語が出現している節	18	7%
総計	258	100%

このデータからは上述した予想が肯定される。258例のうち，84％の節で対格目的語または与格補語などの必須項が出現している。

その意味で，余剰表現となる「を以て」が出現する節には，基本的に他の名詞句が存在するのであり，「を以て」句は，必須の項名詞句の外側に加えられた要素であることになる。このことは「を以て」句とその他の項名詞句との位置関係からも確認される。項名詞である対格目的語や与格補語は，「を以て」句の内側に置かれる。以下は，それぞれ対格目的語および与格補語をもつ例で

ある。

(14)　a　大宰 王命を以て冕服を命じ，(『国語』周語上)
　　b　先王 利を以て秦楚の王に説き，(『孟子』告子下)

これ等の例では，「を以て」句が，(a) 例では「冕服を」という対格目的語に先行し，(b) 例では「秦楚の王に」という与格補語に先行している。またともに主語である「大宰」と「先王」は「を以て」句の外側に置かれている。

「を以て」句が対格目的語などに対してはその外側に位置し，主格主語に対しては内側に位置するということは，「を以て」でマークされる名詞句が，VPの付加詞位置にあることを意味する。この語順位置に違反する例は，今回の調査例には見られない。

付加詞位置にあることは，この「を以て」が付与された名詞句が，統語的機能として定義されるより意味的多様性によって定義される斜格補語であることを意味する[7]。確かに，古漢語の「以」自体が接置詞として多義的であり，訓読日本語における「を以て」もその多義性を反映しているにすぎない。また古漢語における主語名詞句に後行した述語動詞の直前という構造的位置が，訓読日本語文においても付加詞という統語的位置であることを事前に決定しているものではある。しかしそのことが，日本語としては本来動詞である「もつ」という形態素を「をもって」という形式で文法化し，複合格助詞として付加詞を標示する機能につながったと考えられる。

ちなみに，本稿で使用した訓読資料の範囲では，他の複合格助詞の使用数は以下のような数値を示しており，他の複合的な接置詞と比較しても圧倒的に「を以て」が多数となる。

(15)　接置詞（複合格助詞）の使用数

～によりて	11
～とともに	18
～に於いて	66
～を以て	258

これはもともとの古漢語でも「以」の使用数が多いためであるが，「以」に対

して７割程度の使用数となる「於」も[8]，訓読文における複合格助詞としての数は４分の１程度でしかない。このことと，「とともに」および「に於いて」が共格および処格という限定的な意味を標示することとあわせて考えると，訓読日本語における多義的な要素としての付加詞は，「を以て」がほぼ担っていることになる。

それはまた格助詞の使用数からも肯定される。以下は全形態素の品詞判定を行った『論語』と『孟子』についての格助詞の使用数データである。

(16)　『論語』と『孟子』における格助詞の使用数

が	を	に	へ	と	にて	より
203	4428	2393	3	1293	3	105

この数値は，主格，対格，与格に共格をあわせた項名詞句に付与される格助詞が圧倒的で，訓読日本語としては「より」に若干の使用例がある以外，非必須項を標示する格助詞がほぼ使用されていないことを意味する。付加詞標示としての「を以て」の機能の重要性を示唆するものである。

３　「以てす」の分析

「以」は，古漢語では本来「用いる」という意味の通常の動詞としても使用されうる。しかしそれとは別に訓読日本語としては，もうひとつの動詞形がある。以下の例文のような「以てす」という複合動詞形である。

(17)　　我は吾が仁を以てす。(『孟子』公孫丑下)

本来は「以て」が動詞「もつ」から派生したものであるから，動詞として使用する場合は四段動詞の「もつ」の各活用形が存在するはずであるが，この例では「以て」にサ変動詞の「す」が接続した「以てす」という複合した形態となっている。かつこの動詞は，常に格助詞「を」をもった「を以てす」の形態で使用される。

今回の調査では217例の使用例が認められたが，そのうちの156例は，以下のように主動詞，この例では「事(つか)ふ」が，「～を以てす」に前置されている例で

ある。

(18)　a　事父以孝。(『国語』晋語１)
　　b　父に事ふるに孝を以てす。

この例文は，前セクションでみた接置詞（介詞）の構文に書き換えることが可能となる。以下のような文となる。

(19)　a　以孝事父。
　　b　孝を以て父に事ふ。

この２つのほぼ同義の形式については，魯国尭（1992）が（19）のようないわゆる介詞構文を甲型（以下に（20ａ）で再掲する），（18）のような動詞が前置されているものを乙型（以下に（20ｂ）で再掲する）と呼び分析を加えている。

(20)　a　以孝事父。
　　b　事父以孝。

魯は，前者の甲型が動詞への「状語」であるのに対し，後者の乙型が動詞の「補語」であり，両者は構文的に異なるとする分析を示している[9]。その差として魯は10項目を指摘しているが，本稿の議論と関わる構造的な問題としては以下のようなものがある。

(21)　a　甲型の主語は動作主であるが，乙型には被動者や経験者があること
　　b　甲型は「者・所」によって関係節化できること
　　c　甲型は「不・無」によって否定できること
　　d　他の動詞述語がある場合は甲型はそれに先行し乙型は後行すること

この問題を訓読日本語文の文法として考えてみる。以下に甲型と乙型を訓読文として再掲する。（ａ）が甲型で（ｂ）が乙型である。

(22)　a　孝を以て父に事ふ。
　　b　父に事ふるに孝を以てす。

この２つの構文については，２つの考え方が可能である。１つは一方がもう一方から移動によって派生したとする考え方であり，もう１つはそもそも別の構文であるとする考え方である。

移動派生を考える場合は，介詞構造であって制約の少ない（22ａ）のような甲型から（22ｂ）のような乙型が派生したとするのが妥当であろうと考えられる。もし甲型の介詞構文を基底としてそこからの移動を想定すると

(23)　［TP［［父に事ふる *i*］に］［VP［PP孝を以て］［VP *ti*］］す］

のような構造をとることになるはずであるが，この構造では，接置詞句である「孝を以て」を残置したままそれを含むVP中の下位のVPだけを前に移動することになり，やや無理な移動を想定しなければならない。

さらに用例を見る限り，こうした乙型は，その主語が

(24)　　君 臣を使ふに礼を以てし，（『論語』八佾）

のように，移動したVPの外側にある。今回の調査でVPの内側に残存した例はない。主語の内側ということは，もしこれが移動だとした場合，時制辞付与以前の段階での移動ということになる。かつ移動の着点としては，以下の

(25)　［TP［XP［X-spec［父に事ふる *i*］に］［VP［PP孝を以て］［VP *ti*］］［X］］す］

のようなVPに後置される何らかの主要部「X」に対する指定部が妥当と思われる。しかし日本語の統語処理としては，VPとTの間に生起する要素はヴォイス要素またはアスペクト要素しかありえず，移動を発生させる要素「X」を想定できない。よって，「父に事ふる」を前方移動させる文法的な機制は考えにくく，乙型が，訓読日本語としては，甲型から移動派生したとは想定できない。

移動では無いとすると，「以てす」が動詞として存在しなければならないことになる。このことは，乙型が２つの述語をもつ複文となることを意味する。

魯（1992）は，乙型も，動詞に後置される「以N」を補語としている点から考えて，１つの述語動詞による単一の節であると想定しているように思われる。その意味では「以N」を状語とする甲型と同じ１つのVP，１つのTPであるという分析である。

これに対して訓読日本語としては，「以てす」が形態的に動詞であるから，「父に事ふるに，孝を以てす」は複文を構成する２つの動詞述語からなると分析することが可能である。動詞として「以てす」を見た場合，対格を付与することができ，かつ「す」という要素を持つことは，たとえば現代日本語においては，「勉強する」や「スタートする」などのサ変複合動詞と同様であると考えることができる。サ変「する」と複合して動詞となるものを「動名詞」と呼ぶことがあるが，「以て（す）」もそれに類似したもので，「勉強（する）」が，動詞化する名詞という意味で「Verbal Noun」から「動名詞」と呼称されるのにちなめば，「Verbal Postposition＝動後置詞」とでも名づけうる要素と考えることが可能である。

「勉強」といった動名詞に対格付与能力があることは，影山などによって指摘されているところであり[10]，「以て」も，すでに接置詞としての分析のセクションで見たように，対格付与能力をもつ。

ただし，「以て」自体は意味的に他動性を含意するものの[11]，接置詞としての「以て」は，その意味構造中に動作主を指定できないと考えられる。普通の動詞であれば，時制による主格標示がなくとも，それが意味構造的に内包する動作主主語を

(26)　　太郎のラーメンを好む理由

のように，属格などで出現させることができるはずであるが，「以て」については，

(27)　　＊子の其の志を以ての故に

などの形式が見られない。「以て」が構造的に動作主主語を持っていないことを示すものである。

「以て」が他動性を含意するとするならば，それが節として発話されるためには，潜在的にでも動作主主語が指定されなければならない。よって「す」と

の結合が必須となる。この時「す」は，独自の意味構造を持つのではなく，時制辞が結合した段階で主語を表出できるように，「以てす」VP内に主語を生成するための機能をもつだけの存在である。これによって

(28)　　子 何ぞ其の志を以てせむや。(『孟子』滕文公下)

という節が形成可能となる。

ところで，「以てす」は，他動性だけを意味的に持つ動詞であり，その動作内容は指定されない。つまり代動詞としての意味しか持たない。よってこの代動詞の意味が何らかの参照によって解釈可能でなければならない。そこで，代動詞としての「以てす」が解釈可能なように，それに先行する位置に，少なくともVPが存在し，VP複文を形成する必要がある。これが

(29)　　父に事ふるに孝を以てす。

の「父に事ふる」である。このとき日本語訓読文では，「事ふる」という動詞単体の連体形に後接し，完了などを示すいわゆる助動詞類は挿入されない。前置されていない甲型の「を以て」に後続する動詞には，以下の例のように完了の助動詞を添加する例が見られるのと対照的である。

(30)　a　那を以て首と為せり。(『国語』魯語下)
　　b　管叔 殷を以てそむけり。(『孟子』公孫丑下)

乙型の先行動詞が一様に非完了の連体形なのは，一種の不定詞的な表現とするためであると解釈することが可能である。そしてそれは，この先行動詞句の意味解釈に影響する。甲型とした接置詞構造は，

(31)　　以＋N，VP

という形式になるが，このとき「以」には本来の動詞としての「以」がもっていた「拿（取り上げる）」という意味が付属する。さらに発話の直線的な順序は実際の時間的展開の順序を反映するという語用論的な原則に従って，「以＋N」と「VP」は，「Nを取り上げて，それからVPする」という事態の発生順

で解釈される。後続する動詞の示す事態は先行する「以」接置詞句の示す事態の結果的な事態であるという解釈が優先的であるということである。「孝を以て父に事ふ」であれば，「孝行という姿勢をとって，それによって父親につかえる」という解釈である。

もしこの結果的事態を表示する動詞句を，「以」接置詞句の示す事態の生起前の段階で，目的意識といった将来への見通しとして語ろうとするなら，つまり「父親につかえるために，孝行という姿勢をとる」という意味で語ろうとするなら，後置されている動詞句を前置して，語用論的な時間的展開の順序とは異なる順序で構成することが，可能な１つの方途である。目的意識などの将来への見通しであるから，非完了の表現が採用されなければならない。

すなわち結果的な後続事態を示すはずの「うしろ」位置に置くのではなく，将来への見通しとしての事態を示しうる「まえ」位置に置くことが，乙型の構造的な意味であると考えることができる。そしてそのために，助詞の「に」を使用して主動詞を不定詞的な動詞句として先行させ，残余の接置詞を動詞化して別の動詞句とし後続させることで，VP レベルの複文をつくるのが，いわゆる乙型の構造と考えうる。

(32)　a　Ｖ２Ｐ　　＋　Ｖ１（以）Ｐ
　　b　父に事ふる　に　＋　孝を以て　す

という形式である。

甲型と乙型の構造を概念的に示せば以下の（ａ）が甲型，（ｂ）が乙型である。

(33)　a　[TP[VP[Nを以て][VP]]]
　　b　[TP1[VP][に]][TP2[Nを以て][す]]

ここから見れば，（15 a-d）で見た魯（1992）の乙型への制約は，構造に起因することが明らかである。たとえば否定については，以下の（ａ）に示されるように，甲型であればひとつの否定辞「NEG」によって「Nを以てVP」全体を否定できるが，（ｂ）に示されるように乙型では，「VP」だけを否定するしかなく，「Nを以て」は否定の対象に含まれない。

(34)　a　[TP[NEGP[VP[Nを以て][VP]][NEG]]
　　b　[TP1[NEGP[VP][NEG]][に]][TP2[Nを以て][す]]

また，「者」による体言化も同様である。

(35)　a　[NP[TP[VP[Nを以て][VP]]][N 者]]
　　b　[TP1[VP][に]][NP[TP2[Nを以て][する][N 者]]

構造的に甲型は末尾の名詞「者」によって，節全体が体言化されるが，乙型は「～を以てする」部分だけしか体言化されず，代動詞とした「以てす」の意味を補充する「VP」は「者」のスコープに入らない。

なお「以てす」が使用された例で，今回の議論の中心とした動詞句が助詞「に」によって先行している形式以外の分布は以下の通りである。

(36)「以てす」句の分布

「以てす」句の前方

助詞「に」が加えられた動詞句	141	65%
助詞「や」が加えられた動詞句	8	4%
動詞句も無く，かつ動作主以外の名詞句も無い	44	20%
動詞句は無く，動作主以外の主題化名詞句のみがある	10	5%
前方には何もなく，「以てす」の後ろに動詞句がある	7	3%
その他	7	3%
合計	217	

助詞「や」が添加された動詞句は，その機能としてほぼ助詞「に」によって牽引される動詞句と同様であると考えられるので，７割程度が，本稿で議論した構造を持っている。また，前方に動詞句がなく，「主題化名詞句のみがある」または「動作主以外の名詞句も無い」場合の大半についても，さらにそれより前方において，文脈上で「以てす」の代動詞性を解釈しうる参照表現があって，その意味が解釈可能となっている。

4 「以て」の分析

ここまでの２種類は，接置詞としての「以て」を出発点とする構造への分析であった。しかし訓読日本語には，「以て」が対格名詞句を持たずに，単独で使用される例がある。

(37)　　簞食，壺漿して，以て王師を迎へたり。(『孟子』梁恵王下)

この例の「以て」である。

古漢語としての「以」は，動詞を原義として接置詞用法からその他の用法への展開を考えるのが一般的であり，如上の訓読文における単独の「以て」に対応する「以」についても，接置詞が要求する名詞句が「以」に前置される形式，およびそこからさらに接置される名詞句を失って接続詞として使用される形式への研究が中心をしめる[12]。このセクションでは，この「以て」を扱う。

上の例文のような「以て」は，対格名詞句をその直前に持たない。しかし名詞句をまったく前接させないわけではない。

(38)　a　恵(けい) 以て民を和すれば，則ちあつし。(『国語』周語中)
　　b　宴は以て好を合はすなり。(『国語』周語中)

これらの例では，(ａ) では「恵」という名詞が無助詞で，(ｂ) では「宴」という名詞句が提題助詞によって主題化されて出現している。これらをそれぞれ以下のような接置詞構造に書き換えても，談話レベルでの語用論的意味はさしおいて，命題的な意味は維持される。

(39)　a　恵を以て民を和すれば，則ちあつし。
　　b　宴を以て好を合はすなり。

今回の調査では，全部で510例ある単独の「以て」用例のうち，(38ａ) のような「以て」に前置される無助詞の名詞が76例，(38ｂ) のような主題化された名詞の例が36例あった。古漢語の問題としては「以N」か「N以」かという接置詞補語の前置の問題であるが，訓読日本語としては助詞の取り扱い問題である。本来であれば「以て」によって対格を付与されるべき名詞句が，対格名

詞句と同じ位置にあるにもかかわらず，無助詞で出現するか，または主題化のための提題助詞が添加されて出現している[13]。

前置された無助詞または主題化の名詞句と，「以て」が含意する他動性のための動作主名詞句とは，以下の例文に見るような位置関係にある。

(40)　a　夫子は，温良恭倹譲，以てこれを得たり。(『論語』学而)
　　b　それ顓臾は，むかし先王 以て東蒙の主と為し，(『論語』季氏)

この例からは，(ａ) 例のように動作主が主題化されると，前置された名詞句がその内側に無助詞で出現し，(ｂ) 例のように前置名詞句が主題化されるとその右側に動作主が無助詞で出現することが見える。この相対的な位置が混乱する例は，今回の調査では見られない。

その意味では，主題化名詞は主題化された動作主と同じ文頭の主題位置にあり，無助詞の前置名詞はゼロ格で標示される動作主と同じ位置にあると見ることができる。さらに以下の例

(41)　子曰く，君子は，義，以て質と為し，礼，以てこれを行ひ，孫，以てこれをいだし，信，以ってこれを成す。(『論語』衛霊公)

では，無助詞の前置名詞句が対比的に並列されていることを考え合わせると，無助詞の前置名詞は焦点化のための位置に移動していると想定される[14]。つまり「Nを以て」はそれ全体であくまでもVP内部にあるが，「N，以て」や「Nは以て」の「N」は，TPの外側にあるということである。とすると，前置された主題化名詞句または無助詞名詞句と，「以て」の補語の位置で対格を付与される名詞句とは，命題的には同じ内容だとしても，前述したように談話レベルでは異なっていることになる。たとえば以下の

(42)　a　且つ夫れ鍾は，以て声を動かすに過ぎず。(『国語』周語下)
　　b　兆，以て行ふに足れり。(『孟子』万章下)
　　c　其の志，将に以て食を求めむとするなり。(『孟子』滕文公下)

を，対格名詞句にすると

(43)　a ? 且つ夫れ鍾を以て声を動かすに過ぎず。
　　b ? 兆を以て行ふに足れり。
　　c ? 将に其の志を以て食を求めむとするなり。

のように，すべて元の意味とは異質な意味を呈するようになる（ここでは「?」を非文の疑念があるという意味のマークではなく，文脈的に異質な文であることをしめすのに使用した)。

ところで，接置詞「を以て」は基本的に，それが牽引する名詞句を述語動詞と文法的に結合するものである。その意味で最小のVP（またはTP）内で機能する要素であって，統語的または談話的により大きな単位の中にあるものではない。よって以下の例文のように，「を以て」をふくむ節は，そこで文が終止する例が多い。

(44)　　露睹父を以て客と為す。(『国語』魯語下)

これは単独で使用される「以て」にも基本的には相当することであり，たとえば以下の例文，

(45)　　明日 鄒にゆき以て孟子に告ぐ。(『孟子』告子下)

でも，「以て」に後続する述語動詞でこの節は終止する。単独の「以て」例文でもこうした用例が半数を占める。形式的には，単独の「以て」直後の述語はその後に他の要素を持たず，述語自体が終止形で終了するか，連用形で中止するか，連体形で修飾節をつくるか，未然形に「ば」が加えられた形式で条件節をつくるかのいずれかである。

さらに単独の「以て」があくまでもVP（またはTP）内にあることについては，以下の

(46)　　刃を以てすると政と以て異なることありや。(『孟子』梁恵王上)

という例における「以て」が，それに後続する「異なることありや」全体と結合しているとは考えにくいということがあげられる。それは「以て」直前に「政と」があり，この共格をもつ名詞句は「異なる」と結合するのであり，共

格が「ありや」と結合することは意味的には不整合であり，もし「以て」が「ありや」とも結合するとすると，

(47)　　政と　以て　異なる　ことありや

のような相互嵌入状態を生起することになって，統語的に問題が大きいからである。その意味で「以て」は，単独の場合も直近の動詞との最小のVP形成を任としているということができる。

しかしながら，上で見たように，無助詞名詞句や主題化名詞句が前置している句は，単なる接置詞「を以て」句とは異なる解釈をもつ。たとえば意味的に異なった（43ｂ）を，もとの形式とともに以下に再掲する。

(48)　a　兆，以て行ふに足れり。
　　ｂ？兆を以て行ふに足れり。

この例では，「以て」の直後の動詞までであれば

(49)　a　兆　以て行ふ
　　b　兆を以て行ふ

のように，それほど大きな意味差は感じられない。とするなら（48ａｂ）の差を生じているのは末尾の「足れり」であるということになる。単独で使用される「以て」も，接置詞としての「を以て」同様に，末尾の「足れり」に直接関与しているわけではない。しかし本来接置詞であるものを単独の「以て」に変換する要因である前置された名詞句は，「以て」が導く述語動詞のさらにその後の要素を必要としている。その意味で「以て」は，たとえば（48ａ）例で言えば，「足れり」が形成する主節内部に置かれる補文節を標示するのと同様の機能をはたしていることになる。

このことは，単独で使用される「以て」の方が，接置詞「を以て」または動詞「を以てす」よりも，補文構造で使用される率が高いことを予想する。今回の調査結果のデータは，その予想を肯定する。

(50)　各「以て」を含む節末尾の述語の種類

	単独「以て」		動詞「を以てす」		接置詞「を以て」	
述語単独で節を終了させる	325	64%	194	88%	175	68%
モダリティ要素をもつ	40	8%	3	1%	22	9%
補文を形成する	110	22%	10	5%	31	12%
その他	35	7%	14	6%	30	12%
合計	510		221		258	

あきらかに，単独で使用される「以て」は，補文を形成してる比率が，接置詞や動詞として使用された場合より多い。なおここで補文としたのは，形式的に述語に「に」または「と」または「こと」が接続し，その後ろにべつの述語があるものである。

本論は単独で使用される「以て」全てが，本性的に補文マーカーであるということを主張するものではない。「以て」は，名詞句を欠如させて使用することが大半であり，その意味で接置詞だけの存在でいることによって，「with it」や「by it」といった意味を担う一種の省略による代用表現となっていることは明らかである[15]。しかしその省略という形式が，主節の中への補文埋め込みに適切する機能を提供しているのではないかと推測される。

今回「補文」としたのは，対応する古漢語では，「足以，過以，非以，得以，有以，無以」など，本稿で主節を構成する述語とした要素と「以」が隣接しているものであり，主要述語である「足，過，非…」などと「以」との関係は明瞭である。一方で訓読文としては「以て」と「足る，過ぎる，非ず…」などとの距離は遠くなる。

対格名詞句を持たず，主題名詞句の直後という文頭位置に置かれる「以て」は，前述したように，それ自体は「with it」または「by it」といった意味を持って最小のVP（またはTP）内に存在しているが，代名詞省略という性質を本質的に持つ日本語としては，やや余剰で役割が曖昧な形態素となる。しかし，「以て」より前に主題化名詞句や焦点化名詞句がある場合，それらの談話要素は，「以て」が結合する直後の述語を越えて機能する可能性を持つ。これによって「以て」は，さらに後行する主節述語を予告するマーカーとしての機能も併せ持つことになると考えられる。

本稿では，「べし」が日本語文法として助動詞と扱われるので，「べし」の前のVP（またはTP）を補文とする議論を略するために，「可以（以て～すべし）」という形式を（50）の数値からは外した。しかし以下の例のように

(51)　　性，以て善をなす可く，以て不善をなす可し。（『孟子』告子上）

形式的には本稿で「以て」がマークする「補文構造」としたものと同様である。もしこの「可以」を（50）の数値に繰り入れるなら，単独の「以て」の「補文を形成する」の数値は110から256となり，比率も22％から39％となる。

TP（またはVP）の縁にある「以て」が，補文を引導するためにどうやってCレベルの表示をもつのか，「以て～べし」が上述した補文構造によるのかなど，この「以て」には未解決の問題が残るが，本稿では「以て」に関わる接置詞と動詞と補文標示という３種類の使用について，その概要を記述した。

注

1　志波彩子を代表者とする「ジャンル・テキストの中の文法：テキストとその要素としての構文の相互作用」や安岡孝一を代表者とする「古典漢文形態素コーパスにもとづく動詞の作用域の自動抽出」などの科研費研究項目がこの分野の研究を試みている。
2　大島晃（2017）または齋藤文俊（2011）を参照されたい。
3　Comrie（1989）；91
4　三原・平岩（2006）；281-306
5　日本語記述文法研究会（2009）；11～
6　浅山（2004）
7　Andrews, Avery（1985）；81-82，127-128
8　今回の調査では，接置詞であるか否かを問わずに文字数としてみてみると，「以」が1541例，「於」が1071例であった。
9　魯国尧（1992）
10　長谷川（1999）；83-86，および影山（1993）；279-294
11　たとえば邓昌荣（2014）は，「古汉语处置句与以字式的关系甚密（古漢語における他動性構文と「以」との関係は密接である）」ことを指摘する。
12　「以」の目的語前置についての最近の研究としては，郭锐（2009）や方环海・李洪民（2011）などを，「以」の接続詞的用法についての最近の研究としては，吴莎（2014），张以达（2017）などを参照されたい。
13　訓読文における無助詞名詞句の文法的解釈については，浅山（2004）の議論を参照されたい。
14　これはカートグラフィー論におけるCPレイヤー構造で，主題の内側に焦点が置かれて

いるのと一致する。Rizzi（1997）を参照されたい。

15　郭锐（2009）ではこれを「介词悬空（接置詞ぶら下げ）」と呼んでいる。

参照文献

浅山佳郎. 2004.「明六訓読文の助詞の文法」. 神奈川大学人文学研究所（2004）所収；209-239

Andrews, Avery. 1985. “The major functions of the noun phrase.” In Shopen. 1985；62-154

大島晃. 2017（もと1982).「江戸時代の訓法と現代の訓法」.『日本漢学研究試論』及古書院；377-405

大坪併治. 1967.「もて」.『国文学：解釈と教材の研究』12-2；57-58

影山太郎. 1993.『文法と語構成』. ひつじ書房

神奈川大学人文学研究所編. 2004.『「明六雑誌」とその周辺』. 御茶の水書房

郭锐. 2009.「现代汉语和古代汉语中的介词悬空和介词删除」.『中国语言学』2；23-36

吴莎. 2014.「古汉语中介词“以”和连词“以”的用法及区别」.『开封教育学院学报』34-11；24-26

Comrie, Bernard. 1989. Language universals and linguistic typology. 2nd edition. Chicago: University of Chicago.

齋藤文俊. 2011.『漢文訓読と近代日本語の形成』. 勉誠出版

佐川繭子. 2019.「『漢文教授ニ関スル調査報告』の基礎的研究」.『日本漢文学研究』14；45-62

Shopen, Timothy（ed). 1985. *Language typology and syntactic description: Clause structure*. Volume 1. Cambridge University Pres

Sun, Chaofen. 1991. The Adposition Yi and Word Order in Classical Chinese. *Journal of Chinese Linguistics*. 1991-2；202-219

张以达. 2017.「浅析古汉语中“以”字的词性演变及用法」.『唐山文学』243；89-91

陳君慧. 2005.「文法化と借用―日本語における動詞の中止形を含んだ後置詞を例に」.『日本語の研究』1；123-138

邓昌荣. 2014.「古汉语处置句同“以”的关系及基本结构格局」.『韶关学院学报・社会科学』35-3；79-83

程湘清編. 1992.『先秦汉语研究』. 山东教育出版社

日本語記述文法研究会編. 2009.『現代日本語文法２』. くろしお出版

Haegeman, Liliane（ed.). 1997. *Elements of Grammar. Kluwer*

長谷川信子. 1999.『生成日本語学入門』. 大修館書店

方环海・李洪民. 2011.「“X以”的成词过程--以“加以”为例」.『古汉语研究』2011-4；78-79

松尾拾. 1959.「『もて』の研究」『国文学；解釈と教材の研究』4－9；66-70

三原健一・平岩健. 2006.『新日本語の統語構造』. 松柏社

森岡健二・宮地裕・寺村秀夫・川端善明（編). 1982『講座日本語学７文体史』. 明治書院

Rizzi, Luigi. 1997. The first structure of the leftperiphery. In Haegeman. 1997；281-331

鲁国尧（1992）「《孟子》“以羊易之”, “易之以羊”两种结构类型的对比研究」. 程湘清. 1992. 所収；272-290